

<川越市>

**新春** から **初笑** (失笑) …

4 選出馬の川合善明川越市長

## 2020 年の「おれ様市政」を振り返る

昨年は新型コロナウイルスで幕を開け、新年を迎えてなお結末が見えないコロナ禍の悲劇は続いている。打つ手すべてが空振りか見当外れの失態を続ける与党政権は、菅内閣発足の9月には期待値から国民の支持率 65%を得たものの、その後は「Go To 問題」「ステーキ会食問題」などで、支持率は3ヶ月で 39%にまで急落した(朝日新聞による世論調査)。安倍前首相でさえ会食規制だけは守っていたが、菅総理は自律すればいいだけの会食規制を守るつもりもさらさらなかったようで、拳げ句、支持率に反比例する炎上を取って代わってから「反省」「誤解を招いた」などと拙劣な釈明を並べるばかりだ。

国政の自民党がこの有様でも一切責任を取らずに済むことを知っている、自民党会派の地方議員はさらにデタラメのやり放題だ。

### 会食自粛要請などおかまいなし！埼玉県議の大宴会！

年末には自民党の埼玉県議会議員らが 12 月議会最終日の後、さいたま市内のホテルで約 40 人規模の会食を行っていたことがマスコミ各社で報じられた。自民党会派の小島信昭団長は「**感染防止対策は徹底していたが、誤解を招く行為で反省したい**」などと新聞取材に答えている。

県が「**会食は4人以下**」と要請した最中、そのおよそ 10 倍の人数で忘年会を兼ねた議会の打ち上げで盛り上がったのだから、「**誤解を招くどころ**」ではない醜態だが自民党のマニュアルでもあるのか、国政と同じ言い訳をすれば済むということのようだ。

もちろん川越市議会でも、自民党が市長与党会派だ。国政でお墨付きの自民党流デタラメはここでも健在だが、川合市長のやりたい放題の「**おれ様市政**」ぶりは、市長自身がマスコミに取り

上げられない小物政治家だけに世論に追及されることもなく、いわば「安定した破綻」とでもいう不条理な日常がくり広げられている。昨年、自民党会派代表である三上喜久蔵市議は、川合市長が自分の私的な裁判で使うための陳述書を、市長に言われるままに署名・押印している。

あらかじめ川合市長が作文した陳述書に、三上市議はそれを熟読もせずに市長が言うからサインしたという、市長の召使い同然の振る舞いを、なんの恥も屈辱もなくケロリとやってのけていた。問題の陳述書には、わざわざ「私は、平成 21 年、川合善明氏が市長に初当選した当時から市議会議員として川合市長を支援する立場にいます。」とまで書かれていた。

川合市長に下僕同然に媚びてなんの得があるのか知らないが、議員の職責は、主権者である国民、住民の代表である「選良」として、国や地方自治体といった行政が主権者のために公正に働いているかどうかを監視し、市民を無視した暴政があればこれを追及して糾すことにある。

ところが川合市長は三上市議が「市議会議員として市長を支援する立場」などという陳述書を作成し、また三上市議もなにも考えることなく自ら公文書で「市長の使い走り宣言」をしたのである。しかも、その矛先はスラップ訴訟として市長に訴えられた市民女性に向けられているのだ。

市議という公の奉仕者よりも市長の子分でいることを選ぶ政治家など、税金で食っているだけの政治屋に過ぎないが、国政の自民党であれば釈明するだけ僅かにまともというものだ。

川合市長も三上市議も、世論の炎上を心配する必要がないマイナーな「おれ様市政」でデタラメの限りを尽くしていると言って良いだろう。その川合善明市長が、本年 1 月 24 日に投開票される川越市長選に 4 期目の座を狙って出馬する。これまで市長選で投票をしていない川越市民は、昨年の川合市政を振り返り、次の 4 年は市民社会のための奉仕者を選出すべきだろう。

## 「おれ様流」 SNS 削除の法則？！

「憶測」と「決めつけ」で市長発信しては削除…

でも自分を批判する市民は個人の名指しのまま修正もしない

2020 年の本紙と川合市政の闘いは 1 月 14 日、川越市に対する「イズミ工業跡地利用」についての公開質問書提出で幕を開けた。すると翌 15 日、川合市長は自身の Facebook で『勝手な推測と決めつけで「疑惑」を創り出しています』と発言。本紙が提出した公開質問の内容には一切触れもせず、ただ本紙が川合市長を貶めるために川越市に対して公開質問を提出したと結論した、それこそ「勝手な憶測と決めつけ」である。

同文内では「**私も知らない古い事を持ち出し…**」と市の首長にあるまじき失言をした川合市長は、さすがに知恵のある部下にでも進言されたのか、後日まるごと削除していた。行政は市長が誰に変わろうが一貫性・継続性が当然であるため、「**そのとき、私は市長じゃなかったから知らない**」という釈明は自分が市長であることを否定したことになる。

明らかに不利になる発言を削除した川合市長だが、さらに悪質なのは削除の理由に、同 Facebook 記事にコメントを書き込んでいた**外野の人物**（映画監督・GEN TAKAHASHI 氏）を逆用したことだ。川合市長は自分の失言は丸ごと削除しておいて、「**Gen Takahasi**（本紙註：川合氏はローマ字も誤記）**なる名前の人物から品の悪い、気色の悪いコメント書込みがありましたので、一度削除しました。**」などという説明だけは残している。引き合いに出した GEN TAKAHASHI 氏のコメントが気に入らなければ、同氏の書き込みだけを削除すれば良いだけで、もともとの自分の発言を削除する理由になるはずもない。

川合氏は自分の失言に対して、謝罪も訂正もしない（絶対にしたくない）ままなかったことにするためだけに、外野の人物のコメントを、ことさら悪し様にあげつらって悪用した。川合善明という人物が、決して自分の間違いは認めず常に他人に責任転嫁することの証左といえよう。

一民間人であれば性格に問題があるというだけで済む話でも、これが市長というのだから公人として異常な言動というほかない。

ちなみに、人様を名指しで呼び捨てにする川合市長は、川越市民である本紙社主「**松本**」や記者「**大山**」にも同様で、市長としての自分を批判する人間は王に反乱を企てる平民とでも錯覚するのか、さらし首のつもりなのか、そのような自身のコメントは異様な執念をもって決して削除せずに残すという偏執ぶりを見せている。なお、川合善明氏はこのときの Facebook で本紙の公開質問書について「**公開質問書に関することは、近いうちにまたお知らせします。**」と市長として公言しながら、すでに1年を経過した現在までになんらの言及もないままだ。

自分個人への批判に対しては1日と待たずに幼稚に反論する川合市長は、自分が謝罪し説明しなければならぬ市政の失態については、放置したまま逃亡している。市民に向けた自分の発言の責任さえ一切取らない。

本紙が川合市長を「**おれ様市長**」と評する理由は、川合市長がこのような態度を自分から発信しているからにはほかならない。知見が豊かとは言いがたい発言ばかりの川合市長には理解できていないのかもしれないが、「**おれ様市長**」というネーミングそのものが、川合市長の自己矛盾を揶揄しているのである。なぜなら「**市長**」は主権者＝市民の血税で、市民に雇用されている市民の公僕なのであって、本来は「**市民のみなさまの市長**」であることが当たり前だからである。

そんなことも判っていない「おれ様市長」は、今日も我が道を突き進む…コロナ禍に虐げられ続ける市民の税金で。

## 公費で「お手々をつないで」カラオケを満喫

1月中旬に世界保健機構（WHO）が**新型コロナウイルスを検出した**と発表し、日本では1月16日に**初感染者が確認**されてコロナ禍が瞬く間に世界に拡散した。初期には、各国とも新型コロナウイルスの猛威が世界を激変させるとまで正確に予測はできていなかったものの、少なくとも日本政府も2月1日に新型コロナを指定感染症に指定し、社会も次第に得体の知れない**未曾有の危機に緊張感**を募らせていた。そんな2月12日、川合善明川越市長は市内商店会の新年会に公費で参加し、舞台上でコンパニオンの女性と**手をつないでカラオケ**に興じていた。

このときのことについて、小林薫市議が2月19日朝の自身のブログで、コンパニオン女性と手をつないでのカラオケにご満悦の様子**の川合市長の写真を公開**した。すると川合市長は、その日の昼に自身のFacebookにおいて、新年会や懇親会に公費で出席していることや、この他にも女性と2人で歌ったことなどをわざわざ**自分のほうから速報で発信**したのである。

自分の失態を自分から先に出しておけば、やましいことではなくなるとでもいう市長の稚拙な自己演出と詭弁には失笑だが、わざわざ**「間も無く行政調査新聞にアップされると思いますので、事前にこの書込みをしました」**との結びの発言をするに至っては抱腹絶倒であった。

つまりは、こんなことは「おれ様市政」にはなんのダメージもないとばかりに本紙を牽制したつもりだったのである。それは時局に対する緊張感の欠片もない、弛緩しきった市長職の男の単なるスケベ心を正当化するための恥ずかしい虚勢でしかないというのに、川合市長ご本人は本気で**「防御」**出来たと信じているのである。

つくづく、川合市長がメディアに相手にされない小物で川越市民は救われたようなものだ。

もしも、この写真がワイドショーで取り上げられていたら、川越市民というだけで**「え？あのお手々つなぎカラオケ市長で有名な？」**と笑われていたかもしれない。川合市長という人物は、市長としての政治家としての実績や市民社会自体にまったく関心はない。あるのは、**自分に従うしかない市職員や一部の下僕市議の生殺与奪**を握ることができる**「市長という権力」**への執着だけだろう。だからその座から引きずり下ろされることを何よりも恐れている。

## 「お手々をつなく」けれども「女性を触らない」市長

さて、コンパニオンとお手々をつないでも、公務の一環とはばからない川合市長だが、一方、自身が原告となって市民女性A氏を名誉毀損で訴えている裁判では、やおら立ち上がって裁判長に向かって「私は女性を触ったりしません」と、聞かれてもいないことを直訴したのである。

触ったことがないという「女性」が一般名詞なのか、自分が裁判で訴えた市民女性のことなのか不明だが、仮に弁護士であるなら裁判では不用意な一般名詞は避け「被告を触ったことなどありません」と言うのが普通だ。裏目読みをすれば、理由はともかく川合市長は被告女性の存在と告発を異様なまでに意識しているとも見える。

いずれにせよ公務より裁判に出廷する時間を優先する川合市長は、相手方の弁護士や裁判所、自分の弁護士までも振り回す。次回期日（次の裁判の日程）を決める時でも、自分の「差し支え（他の用事で出廷できないという意味）」を理由に期日調整に手間を取らせる川合市長だが、そもそも弁護士はこういう場合の代理人だ。行政訴訟でさえ、市長本人が毎回裁判所にノコノコ現れることなどない。そのうえで川合市長の「差し支えがない期日」は、例えば本来、市長が待機すべき重要な会議（災害対策支援会議）だったこともある。川合市長にとっては、市民社会よりも自分の利害を争う裁判のほうが重要というわけだ。

## 数が物を言う市長与党 川合市政の腐敗を決定的に露呈した12月議会

川合市長は12月議会が始まる前の11月12日、本年1月24日に行われる川越市長選挙に4選目出馬を記者会見で発表した。その後に開催された12月議会には、川合市長初当選後の平成21年3月議会において、川合市長自身が提案し条例化された「市長の在任は3期まで」とする多選自粛条例の廃止の議案を、川合市長自身が提出した。言うまでもなく、川合市長が4期目の市長になるための、まさに「おれ様」ならではの自作自演でしかない。この議案は賛成18・反対16で辛くも可決されたが、資格上は弁護士でもありながら市の法律とも言うべき条例を、自分の都合で邪魔になれば平然と廃止する川合市長は、文字通り「嘘つき市長」の馬脚を露わしたのである。

なぜなら、平成21年の多選自粛条例制定の際の議会において、川合市長自身が「多選を防ぐ何らかの手だてを決めるということも私の主張の中に入っていて、それを支持してくださったから当選することができた」と答弁しているように、多選自粛条例を自分の手で葬り去ることは、市民不在の「おれ様市長」を自ら宣言しているに等しいからである。

また12月議会では「**小江戸 蔵里**（くらり）」の次年度の指定管理者選定に関する議案も提出された。本紙既報のとおり、市の執行部が新たな指定管理者として選んだ「TKM」は、来る市長選で川合市長の唯一の対抗馬となった**川目武彦市議**（現在は市長選出馬のため辞職）の主力後援者の息子が経営する新興のホテル経営会社だ。ところが、どういうわけか昨年10月頃から、川目市議の有力後援者でもあった「TKM」社長の実父は、**川目陣営から離脱**した。

町の噂では、川合市長による指定管理者選定をエサにして「TKM」を籠絡した、川目票の切り崩しではないかと囁かれた。それほど不透明で邪（よこしま）な空気は市議会にも影響し、多選自粛条例廃止の議案では、自民党・清令会・政晴会などの市長与党が賛成者となり可決されたものの、「TKM」の議案では**前代未聞の全会一致での否決**であった。

つまり川合市長は、自分の与党会派市議にさえ愛想を尽かされたということだ。

多選自粛条例廃止は市長与党が数で可決したものの、ギリギリの通過だった。

本紙の追跡取材では、各与党市議からは「**川合市長が4期目の市長になろうがなるまいが、どうだっていいからです**」という本音が聞こえてきた。こうした市議の心情は、川合市政と川越市議会の腐敗を浮き彫りにするが、実際に「**蔵里**」指定管理者選定を市長与党の全員が認めなかったことから明らかなおとおり、市議は最終的には支持母体を失いたくないだけで、**川合市長となら心中**しても構わないなどと考えてもいまい。「TKM」議案は、真っ向から川越商工会議所を敵に回すことになったため、市長与党議員でも賛成することは出来なかったのだ。

この否決は、「**蔵里**」の本年4月からの指定管理者不在ということの意味している。このまま行けば、4月からは「**蔵里**」は閉館したままである。川合市長はこの責任をどう取る気であるのだろうか。多選自粛条例を廃止することなどは、どうでもいいことだとした市長与党市議の本音はここで意味を持つ。川合市長の4期目市長当選は、川合市政追及が継続されるということだからだ。次の議会は3月議会であるが、「**蔵里**」の指定管理者についての市からの報告等があると思われる。この時、川合氏が4期目市長であるなら、市議らより「**蔵里**」の指定管理者不在の政治責任について追及されるであろう。

昨年12月議会では、小林薫市議の一般質問「**市長の政治姿勢について**」の中で川合市長の問題発言も飛び出した。小林市議は前述した川合市長の「**手つなぎカラオケ**」について質疑している。

川合市長は「**カラオケでコンパニオンの女性と手をつなぐことは普通のこと**で**なんの問題もない**」との主旨を答弁したが、そのような市長は全国でも川合善明氏ただ1人だろう。

小林市議が、同様の行為をどれだけ記憶しているかを質疑すると川合市長は数件の店の名前を出して「**10回ないくらいである**」と答弁した。すると小林市議は、市長答弁にはなかった自身も同席した他の飲食店や宴会場の名前を例に挙げて、市長の記憶のあやふやさを指摘した。

同時に川合市長が原告となって訴えている市民女性A氏の裁判での市長発言「**私は女性を触ったりしません**」と、議会答弁の食い違いを指摘した。

すると、なんと川合市長は小林市議の発言について「**これは全く小林議員さんのフェイクでございます**」と自分の発言を否定したうえで、「**先ほどの、この裁判でのやりとりについて撤回をされない場合は、現在、行っているのと同じように議場での発言を名誉毀損として、また損害賠償請求を行います。撤回してください。**」と小林市議に対する恫喝に等しい訴訟予告を議場で行ったのである。この一幕も、**市長が議員を議場で恫喝する**という川越市制始めて以来の**歴史的汚点**として**議事録**に残された。

## 市長も市議も、最も苦しむ市民の税金で会食！ 川越市民は次の4年も沈黙のまま踏みつけられるのか？！

まもなく川越市長選挙が始まろうとしている。12月議会で多選自粛条例廃止に賛成した自民党を中心とした市議らは、4選目に出馬する現職の川合市長を支援することは明らかである。

従来からの市長後援者市民も、引き続き川合氏に票を投じるだろう。だが市長与党は安泰だろうか？ 冒頭の国政自民党の支持率急落に話を戻そう。

新内閣発足からおよそ3ヶ月で菅政権の支持率は、自民党支持層内部でも下がっている。このような現象は自民各議員の支持者からの突き上げが起きていることを物語っている。昨年、突然世界の様相を一変させた「**コロナ時代**」に入って以降、人々がこれまで特に考えることもなく容認していた社会や生活の仕組みについて、真剣に思考するようになったからだろう。

与党もマスコミもコロナ禍と一口に言うが、国民の現実には過酷を極めている。一般庶民の誰もが知っていることだが、政治家も市議もコロナ禍の被害が及ばない立場である。税金で生きているからだ。政治家によっては事業を営む者もいるが経営が苦しくなれば、社員…パート…アルバイトを解雇すれば済む話で、公人である限り自分と家族だけは生活していられる。それも大多数の日本国民の平均収入をはるかに上回る高額な給料を税金から得ている。

すなわち政治家や公務員とは、「**自分のことだけを考えても生きていける**」職業だと言っても過言ではない。制度上、それが事実だからだ。自身で提案した条例を廃止する「**嘘つき市長**」を支

援する川越市議らは、コロナ時代に最も苦しめられている有権者市民に対して、どのような説明をしているのだろうか？ 常識で考えても川合氏は、単に市長の座にしがみつきたいだけの目的で多選自粛条例を潰したことは明らかだ。「**コロナ禍を乗り切るためには現職の続投が必要だ**」などという川合市長のマスコミ発言は、新春初笑いどころか市民から笑顔を消し去るふざけた自作自演だが、市長与党市議らはこの市長が川越市の次の4年も市民のために必要だという理由を、支持者にどう説明できるのか。未定のままの「**蔵里**」指定管理者問題ひとつだけでも、川越商工会議所や事業者には死活問題が放置されたまま年だけが明けた。

すべて川合市長の政治責任が追及される大問題だが、川合氏は市長に4選さえすれば、いかなる政治的責任を放置しても生きていけるのである。市民の血税で食っているのだから。そしてそれを追及すべき市議たちも、議員である以上は「**議会ゴツコ**」を演じていれば食っていける。態度が悪い市職員も、市長に逆らわなければ一生の生活は安泰である。いつの時代でも最も苦しむのは納税者たる市民だが、そのような社会を許しているのも市民自らなのである。

ネット上に溢れかえるほど発信されている専門家や有識者らの分析では、コロナ時代は今後の数年では終わらないと予測している。豪雨被害の際に「**待機**」と称して自宅でくつろいでいた川合市長が、目下、人類史上最大の苦難とさえ言われるコロナ禍を乗り切ることなど不可能だろう。なぜなら、川合市長には市民社会の危機を乗り切る気など毛頭見受けられないからである。市民に危機があろうがなかろうが、川合市長は自分が市長でさえいられば、さらに4年間は好き放題に権力を振りかざしながら高額な報酬を得て最後には、およそ**7千万円とも言われる巨額の退職金**を手にして、悠々自適に余生を送れるのである。

川合善明市長の<**平成 21 年(2009 年)の多選自粛条例制定の際の議会答弁**>を、再び引用しておこう。

**「多選を防ぐ何らかの手だてを決めるということも私の主張の中に入っていて、それを支持して下さったから当選することができた」**

その12年後、川合市長は政治家としての成長と実績を築く代わりに、平然とウソをつき…なし崩しに市民を放置し…結局は自分が何をやるわけでもなく権力だけを振りかざす「**おれ様王国**」の建国だけは達成できたようである。しかし、川越市の「**おれ様王国**」は、有権者の7割以上を占める棄権票によって成立している。**すべての主権は、市長でも市議でもない、いま最も苦しめられている庶民の手**が握っているのである。